台大日本語文研究第 10 期
2005 年 12 月，頁 1～26

論〈佛法僧〉

趙姬玉 *

摘要

上田秋成的短篇小說集《雨月物語》分爲五卷五冊九篇，其中的第五篇〈佛法僧〉和首篇〈白峰〉以及最終篇〈貧福論〉，與其他六篇頗異其趣，除了怪異的情節之外，穿插極富知識性的論辯。就中又以〈佛法僧〉所包含的知識性最爲豐富。

本論文重點在於探討秋成在〈佛法僧〉中的創作意圖、創作手法以及作品的主題，試圖提出新的觀點。就篇名而言，秋成本人曾經前往高野山參拜，途中聽到三寶鳥（仏法僧鳥）的叫聲，留下深刻的印象，顯然成爲他撰寫本篇的原動力。在靈怪現身的設定上，筆者認爲秋成打破常見的因果關係設定手法，讓讀者留下強烈的印象，試圖提高表現效果。至於〈佛法僧〉特有的知識性內容，筆者認爲和怪異性並不衝突，反而成爲本篇的一大特色。在典據方面，筆者透過內容的比對，認定〈永州野廟記〉和〈小水灣天狐遺貽書〉也是本篇典據之一。

在結語中，本人認爲〈佛法僧〉的主題在於強調：對活在現世的每個人而言，善惡存在於一念之間，禍裡有福，福裡有禍，有時未必能完全倚靠宗教的力量，最佳之道還是自力修行。

關鍵詞：佛法僧、殺生關白、豐臣秀次、高野山、玉川

* 國立台灣大學日本語文學系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

臺灣大學學術
期刊資料庫

A Study on “Bupposo”

CHAO Chi-yu *

Abstract

Ugetsu Monogatari, a short novel selection of Ueda Akinari, is divided into five volumes, five books and nine stories; among them, the fifth story “Bupposo,” the first one “Shiramine” and the last one “Hinpukuron” are much different from the others, woven with weird plot and knowledgeable debates, which are especially abundant in “Bupposo.”

This dissertation emphasizes on discussing Akinari’s motivations, techniques and themes of creating “Bupposo.” The story title comes from Akinari’s personal experience of once hearing the Bupposo bird’s calling on his way to Mt. Koya, which left him a deep impression, is obviously the motive power of writing this story. In the setting of ghosts appearing, Akinari abandons the common techniques of cause and effect, trying to leave deeper impressions on the readers and aspirate the effects. The specific knowledgeable content in “Bupposo” is also quite matched with the weirdness of the story, and becomes a great characteristic of this story. Besides, by comparing and contrasting, I regard “Yon-Zhou-Ye-Miao-Ji” as one of the origins of this story.

In the conclusion, I consider the theme of “Bupposo” emphasize the fact that: for everyone in this modern age, the best way is to be independent, not relying on religious powers.

Key words: Bupposo, Sessyokanpaku, Toyotomi Hidetsugu, Mt. Koya, Tama River.

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

「佛法僧」論

趙姬玉 *

要旨

『雨月物語』は五巻五冊九篇からなる『雨月物語』の諸篇のうち、第五篇の「佛法僧」、巻頭を飾る「白峯」および圧巻の「貧富論」は、他の六篇と趣を異にし、怪異性の外に、知識的な論議が織り込まれている。なかでも「佛法僧」の知識的な性格がもっとも顕著である。

本論文では、「佛法僧」における秋成の創作意図と手法、そして作品のモチーフなどに焦点を絞って考察を進める。まず題名について言えば、秋成が高野山参詣の時に聴いた仏法僧の声が深い印象として残り、「佛法僧」を創作する原動力となったことが考えられる。怪異出現の設定では、秋成は因果関係という常套的設定手法を打破り、強烈な印象づけと筆運びで表現効果を高めようとした。さらに、「佛法僧」の知識性は、怪異性と矛盾するものではなく、調和の取れた形で共存しているので、むしろ作品を特徴付けるものとして高く評価すべきである。そして典拠については、語句の対照比較を通じて、「永州野廟記」と＜小水湾天狐貽書＞を出典の一つと考える可能性を提示した。

最後は「佛法僧」のモチーフであるが、本稿では、この世の中に生きる人間にとって、禍福はあざなえる縄のごとしで、宗教の力が頼りにならない場合もよくあるから、他力よりも自力、これこそ「佛法僧」のモチーフではないかという結論に到達した。

キーワード：佛法僧、殺生関白、豊臣秀次、高野山、玉川

* 台湾大学日本語文学系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

「佛法僧」論

趙姫玉

一、始めに

『雨月物語』九篇のうち、「白峯」と並んで、同じく紀行文のような書き出しから話を導入する「佛法僧」は、従来は、上田秋成は当時の噂噺である、『怪談とのゐ袋』(1768 年) 巻四の「伏見桃山亡霊行列の事」、つまり殺生関白豊臣秀次(以下、秀次と略す)一行の亡霊事件を骨組として書かれたものと考えられている。ただ、「伏見桃山亡霊行列の事」の舞台が桃山であるのに対し、「佛法僧」は秋成がかつて遊歴したことのある高野山を背景にして、成立した怪異譚なのである。

秋成はなぜ「佛法僧」の舞台を高野山に選んだのだろうか。そして、なぜ、「佛法僧」という題名で亡霊出現の怪異の一夜を構成したのだろうか。この怪異談の主軸をなす高野山での恐怖の一夜の出来事、主人公拝志夢然(以下、夢然と略す)が語った仏法僧という鳥に関する知識、紹巴が語った玉川の水についての考証などを手掛かりに、本篇のモチーフを追究することができると思われる。本論文では、「佛法僧」における秋成の創作意図と手法、そして作品のモチーフなどに焦点を絞り、考察を進めることにする。なお、本篇の中国関係の典拠は、『剪燈新話』の「富貴発跡司志」、「天台訪隠録」、「龍堂霊会録」と「武平霊怪録」の四話とされるのがほぼ定説になっているが、私見としては、さらに『醒世恒言』の二話を加えたいと思う。

二、題名について

周知のように、秀次は高野山に追い込まれ青巌寺で自殺した。こ

臺灣大學學術期刊資料庫

の事実をもとに、高野山で亡霊の一行が現れることを描いたこの怪異譚自体には確かに矛盾は見られない。しかし、いわゆる「悪逆塚」の所在である瑞泉寺と秀次の首がさらされたと言われる三条河原は、両方とも京都にあるし、主人公の夢然も京都に別宅があり、時々行くご隠居様として設定されている。そして『怪談とのゐ袋』にも取り入れられた亡霊事件が噂されていた場所も伏見桃山となっている。したがって、京都あるいはその近郊の伏見桃山でのできごととして構成されてもおかしくないはずである。にもかかわらず、秋成はいろいろな典拠、記録、伝説を参考にしながら、舞台をわざわざ高野山のような大徳の高僧が開いたという清浄の地に変えたのには、それ相当の配慮があったにちがいない。そして、そのような変更が、「佛法僧」をそのよりどころとなる諸典拠よりも知的で優れたものたらしめたのではないだろうか。以下、「佛法僧」の題名、「佛法僧」における怪異の出現、「佛法僧」に反映した秋成の知識的性格、「佛法僧」の典拠などについて論じてみたい。

まず、物語の舞台が京都あたりではなく高野山に変えられたのは、秀次が自害したところが高野山青巌寺だったからだと考えられるが、理由はそれだけではないと思われる。作中において夢然がせがれの作之治に語ったように、「かの鳥は清浄の地をえらみてすめるよしなり。上野の國迦葉山、下野の國二荒山、山城の醍醐の峯、河内の杵長山、就中此山にすむ事、大師の詩偈ありて世の人よくしれり」ということも理由の一つである。すなわち、仏法僧という鳥が高野山に棲んでいること、しかも「この山なん第一の道場なり」ということこそが、物語の舞台を京都あたりではなく真言密教の総本山である高野山にした最大の理由であるように思われる。

仏法僧という鳥は、三宝鳥とも言われ、その鳴き声は仏教三宝である仏、法、僧（ぶっぽうそう）と聞こえるので、この名を付けられた。本篇は、夢然父子と秀次一行が高野山で仏法僧の鳴き声を耳にしたこと、その鳴き声が句にも詠まれているなどから、この題をつけたのであろう。秋成は『胆大小心録』の 45 条において、『新撰

臺灣大學學術期刊資料庫

六帖』[1]と『続無名抄』に入っている藤原光俊「松の尾の峰静かなる曙に あふぎて聞けば仏法僧啼く」という松尾神社の山を詠む歌にふれ、「仏法僧は高野山で聞たが、ブッパン／＼とないた、形は見へなんだ」と書いており、さらに46条では、高野の玉川に毒があるかどうかについても考証している[2]。かつて遊歴した高野山で実際に仏法僧鳥の声を聞き、それによって得たこの鳥に関する知識がとても印象的であったため、そのヒントで仏法僧のような罪を滅ぼし善を生ずる鳥、しかも昼には鳴くことのない鳥を作中に取り入れ、怪異性と知識性の一話を展開させたと考えられる。

本篇はまず太平治世の謳歌から語り出される。楽隠居の楽しみを味わい、名山勝景を満喫しているうちに、夢然親子は「そゞろなるかな」と軽い気持ちで高野山へ行くことにした。そして清浄の地→滅罪生善の鳥→夜しか鳴かない鳥→夜の高野山→秀次の亡霊→玉川の歌の知識の披露→恐怖の頂点→現実世界に戻った後に残る恐怖感、というように、徐々に高まった感激も怪異で恐ろしい一夜の体験で吹き飛んでしまった。後日になっても、それまでとは違って、昼間の京都三条橋を通ることさえ恐怖を感じている。これが本篇のプロットであるが、仏法僧鳥の声は最初から最後まで作品の表現効果に大きな役割を果たしているといえよう。

なお、浅野三平氏の考察によれば、秋成が語った仏教の「三宝」すなわち仏と、仏の教えと、仏を信ずる僧を意味するという仏法僧鳥に関する知識、あるいは玉川の歌、ないし真済 編、弘法大師の詩文集『性霊集』の「寒林獨座草堂暁……」という詩の程度の知識なら、当時の人々はいくらでも随筆、雑書に見ることができるという[3]。そうだとすれば、秋成は当時の一般的な知識を生かし、読者と共通の理解を持つという手法で、この怪異談を作り上げたのだろうと考えられる。この点からも、秋成が時代の風潮を敏感にキャッチ

[1] 類題和歌集、六巻、1244年になるか。『新撰六帖題和歌』とも呼ばれる。
[2] 『上田秋成集』（日本古典文学大系、岩波書店、1971年5月、281頁。
[3] 浅野三平「「仏法僧」の母胎」（『上田秋成の研究』、桜楓社、1985年2月、276－294頁）。

臺灣大學學術期刊資料庫

できる鋭い感覚の持ち主であることを知ることができると言わなければならない。そしてこのような鋭い感覚を持っているからこそ、秋成は一瞬のひらめきで、高野山遊歴の際に印象に残った感覚あるいは一般知識をフルに生かし、「佛法僧」を創作できたにちがいない。

諏訪春雄氏は、近世文学と近代文学の価値観のもっとも大きな転換について論じるにあたり、近世文学の場合は「典拠が明確であってこそ、その改作の苦心もまた納得がいく。」「このような考え方の根本には、作者個人やかぎられた読者にしか通じないような個性や独創よりも、《万人の共通財産になっている表現の型》をおもんじようという精神がはたらいている。」と述べられ、二つの時代の文学観のもっとも大きな評価の標準の違いは剽窃とも言える翻案方法に対しての評価の違いにあると、興味深い見解を示されている[4]。「佛法僧」を同氏のこの見方に当てはめてみれば、秋成はまさにこのような《万人の共通財産になっている表現の型》を用い、他人の追随を許さない優れた作品を創作できたのである。

秋成が高野山参詣の時に仏法僧の声を聞いたことは、晩年になっても忘れられないと見え、そのことを『胆大小心録』に書き入れている。このことは、秋成がこの鳥にどれほど関心を持っていたかの一端をよく示している。仏法僧鳥の声を聞いたことが、結局「佛法僧」を成立させるもっとも大きな原動力となったことは想像に難くない。中村幸彦氏がこの一条と紹巴が毒の玉川を論ずる一条こそ秋成生涯得意の論であり、秋成の「考証癖を生のままに出したところが味噌である」と説かれた所以である[5]。

三、怪異出現の設定

『雨月物語』九篇における怪異出現の設定について言えば、まず、「白峯」では、かつて崇徳上皇の臣下だった西行が、崇徳上皇の亡霊

[4] 諏訪春雄「江戸文学とはなにか」(『江戸文学の方法』、勉誠社、1997 年 4 月)。引用は 6 頁による。
[5] 中村幸彦『秋成・馬琴』(角川書店、1977 年 2 月) 33 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

に出会ったという設定だから、少しも不自然なところがない。「菊花の約」の場合、生死の交りである左門と宗右衛門の亡霊との出会いも至極当然である。「浅茅が宿」では、夫の言葉を信じて戦乱の世で待ち続け、結局死に追いやられた妻が、夫への愛情と「待つ女」の怨み辛みを死別した夫に知ってもらいたいという女の情念・執念で亡霊として現れ、夫と一夜を過ごした、という必然性のある設定となっている。「夢應の鯉魚」の場合、前に買った魚を入江に放してやったという放生の功徳があるうえに、夢で見た鯉魚を絵に書いてみずから「夢應の鯉魚」と名づけた主人公が病気にかかっている間、鯉魚になって怪異を体験した、という構成も筋が通っている。

「吉備津の釜」における、薄情の夫が自分に裏切られた女房の怨霊に取り付かれ殺されたという筋の設定にも、全く破綻が見られない。「蛇性の婬」の豊雄は、現代で言えば、ハンサムで、女心をひきつけやすいプレイボーイなので、天性みだらな蛇の化身である真女児に魅せられ、一連の怪異に巻き込まれるという設定も、矛盾のない設定である。「青頭巾」では、大徳の高僧と食人僧のできごとなので、怪異の設定も適当と言える。最終篇の「貧福論」では、お金の価値をほんとうに知っている主人公の前に黄金の精霊が現れる、という因果関係による設定である。結局、『雨月物語』の九篇は、真中の第五篇である「佛法僧」を除いて、主人公の設定にいずれも因果関係が見られるので、怪異の現れる必然性と言えないまでも、可能性が充分に存すると考えられる。

しかし「佛法僧」の場合は違う。主人公である夢然父子が、秀次主従の亡霊に出会う必然性は全くないと言ってよい。「よしなき奴に我姿を見せつるぞ、他二人も修羅につれ來れ」の一句は、秀次の家臣も夢然父子も、まったく予想外のできごとで動転しているばかりでなく、読者にも大きな衝撃を与えたにちがいない。なぜ夢然父子がこんなひどい目に会わなければならないのか、筋としての必然性がないのではないか。運悪くもとんでもないことに巻き込まれたとしか言いようがない。つまり「佛法僧」では、怪異が出現する必然

臺灣大學學術期刊資料庫

性はないのである。しかし、これを「佛法僧」における創作手法の欠陥と考えていいであろうか。

物語の主人公拝志夢然の設定について、冨士昭雄氏は、名前の読み方が同じ「はやし」ということを根拠に、主人公の名前は「当世智恵鑑」巻一の主人公「林喜兵衛」の名前をもじったもので、山に登る部分の描写などの類似から見ても、この二つの作品は極めて関係が近いと説かれている[6]。一方、木越治氏は、主人公の名前は舞台になっている高野山にありふれた「林」ではなく、「拝志」となっていること、ついでの高野山見物をする「寺院僧坊に便りなき人」（寺院、僧坊に知り合いのない人）であるゆえに、泊めてもらえなかったこと、などを手掛かりに、夢然親子は最初から「この地にあることをすでにして拒否されている存在で」あり、彼ら自身もそれに感づいているゆえ、違和感がありながら、声高らかに大師の徳とこの地の霊性を語り続けなければならない、そのことにより亡魂たちを招き寄せた結果になった、というように指摘されている[7]。

両氏の見方の当否はともかく、私見では、このような人物設定には、秋成のそれなりの配慮があったと考えられる。主人公を高野山の土地の人間でもなく、秀次ゆかりの京都の人間でもないが京都と関連性を持つ人間に仕立て、「白昼ながら物凄ましくありける」と夢然が「京人に語りしを、そがまゝにしるしぬ」というように、後日談のかたちをもって、間接的にその晩に体験した恐怖の程度を語らせている、という述べ方も、秋成独特の描写手法と見ることができる。

言い換えれば、舞台が変わっても、秀次を連想できる、京都に別荘を持つ人間だったので、短い一語だけで、あの晩の想像を超えた恐ろしさを言い尽くすことができた。また、作者は直接に感想をも

[6] 冨士昭雄「雨月物語の構想―浮世草紙の影響」（日本文学研究資料叢書『秋成』、有精堂、1972 年 3 月、112－113 頁）。
[7] 木越治「「仏法僧」断章」（『秋成論』、ぺりかん社、1995 年 5 月）。引用は 365－366 頁による。

臺灣大學學術期刊資料庫

らしたのではなく、当事者の言伝えという形式、つまり作中人物との間にある距離を持つことによって、作者の語ったことを客観化する効果も狙っている。このように考えると、秋成がどれほど人物と舞台の設定に工夫しているか理解することができる。亡霊事件が噂となっていること自体、怪談にふさわしい構成であるといえよう。

主人公と亡霊との出会いに偶然性を与えた設定は、秋成が舞台を伏見桃山から高野山に変えたのと同じ効果を狙っているように思われる。つまり、このような登場人物の設定によって因果関係という常套的設定手法を打破り、青天の霹靂にも等しい強烈な印象づけと筆運びで表現効果を高めるという狙いである。秋成の鋭敏な思考と優れた表現才能の一端を窺わせるのに十分な設定と言わなければならない。

四、「佛法僧」の知識性

「佛法僧」も、中日両国の諸作品から直接あるいは間接に影響を受けたことは言うまでもない。しかし、「佛法僧」の典拠として今まで取り上げられた諸作品のいずれも、「佛法僧」と比べて考証的性格が少ないことは明らかである。日野龍夫氏は、「佛法僧」における創作意図について、「本篇は、高野山の夜の闇の恐怖と、秀次にまつわる……残虐なイメージの恐怖とを重ね合わせることを意図したものである」と指摘されたうえで、秋成が考証に筆を費やしすぎたため、創作意図が十分に達成されず、全体に散漫な印象がある、というふうに本篇の知的性格を捉えられている[8]。さらに、「本作品は秋成の文学の一面を代表する作品と認めながら、それだけに考証評論が先立って造型に乏しい恨みがあり、考証本位で寓意もなく、魅力に乏しい」とする暉峻康隆氏の見方も[9]、秋成の大師の霊力、あるいは霊場高野の〈聖性〉へのなかば盲目的なまでの信じ込みを問題とす

[8] 日野龍夫氏の「解説」(市古貞次・小田切進編『雨月物語』、ほるぷ出版社、1986 年 9 月、24 頁)。
[9] 暉峻康隆「文人的作家―庭鐘と秋成」(暉峻康隆・郡司正勝編著『江戸市民文学の開花』、至文堂、1967 年 4 月)、127 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

べきだという坂東健雄氏の指摘も[10]見逃してはならない。

一方、重友毅氏は「佛法僧」の知識的性格について、「佛法僧はこれまでにも多くの批評家によって、あまりにも知識的であるという理由の下に、しばしば非難の対象となされてきた」と「佛法僧」に対する従来の批判の多いことに言及され、「そういう徒らなる非難を加えるよりもさきに、まずそれが作者によって、いかに作品の中に位置せしめられたかを見極めることを先務とすべき」だと強調しながらも、「考証のためともいうべき部分は、量において、実に全体の五分の一を占めている。しかも、それは一篇の構成の上に、必ずしも緊密な関連をもっているものとはいいがたい」と指摘されている[11]。諸氏によって指摘されているとおり、「佛法僧」の全体に占める玉川古歌の考証に関する部分の量は、確かに極めて多い。しかし、これについては、違う角度から説明することもできる。

高野玉川の伝説については、古くから諸説がある。貝原益軒の『大和本草』に「其水上ニ砒石アルカ」とあり、小野蘭山の『本草綱目啓蒙』にも高野山に砒石の産することが言及されている[12]。西鶴の『椀久一世の物語』上巻に、すでに「東の山陰に玉川の水、忘れても毒は彼の一つの色なり。人皆つゝしむべき事ぞ」というくだりがあることは、重友毅氏によって指摘されている。氏はさらに、本篇における秋成の考証的言説について、「ややなまのままで出されすぎたきらいがある。」と評されている[13]。「玉川の流れには毒あり」という弘法大師の歌をこの作に取り入れたことは、『雨月物語』が怪談小説といってもそれにとどまっているわけでなく、怪異性の外に議論・知識・考証・人間性・友情などをめぐる話もかなり織り込まれていることを物語っている。このようにバラエティに富んでいればこそ、その構成にいろいろ難点がありながら、外の怪談小説より高

[10] 坂東健雄『上田秋成『雨月物語論』』（和泉書院、1999 年 6 月）269 頁。
[11] 重友毅「雨月物語の知識的性格」（『秋成の研究』、文理書院、1971 年 5 月）130 頁。
[12] 注 10 に同じ。
[13] 重友毅『雨月物語評釈』（明治書院、1954 年 4 月）236 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

い評価を得ているのではなかろうか。そういう意味で、怪異性とともに、知識性を支柱として仕立てられているが、両者が矛盾することなく、調和の取れた形で共存している「佛法僧」は、『雨月物語』にとって、欠くべからざる作品の一つと認めてもいいと思われる。松田修氏が本篇を秋成の力作と見なし、「面白くもおかしくもないものを、ともかく読ませる筆の螺旋状の進行は、大変な力業である。秋成の巧みさはここでも細部にこそ生きる。」と賞賛される所以である[14]。

「佛法僧」の前半部における考証的議論は、高野山の静寂な雰囲気にふさわしく、ゆっくりとかつ平穏に進められている。物語が静かに進行している間は、夢然父子ばかりでなく、読者をもリラックスした気分にさせ、しばらく我を忘れる境地に身を置かせる。しかし、物語のその後の展開は急転直下し、やがてクライマックスに達し、最高の恐怖感をわれわれに味わわせる。平和から→緊張へ→緊張の緩和のあと→さらに恐怖へ→恐怖を帯びたまま現実の世界に戻る、といった展開から見れば、考証的部分が多すぎるとする従来の説は、確かに否定することはできない。それにしても、玉川の歌について議論する部分は、決して全体にとってふさわしくない部分ではない。しかもこの知識的議論は、「弘法大師」の大徳で開かれた高野山と玉川に関する矛盾についての問答である。それが「殺生関白」と言われる秀次などの亡霊の口を通じて行われることは、強い対照をなす上で大きな効果を収めている。この点を見逃してはならない。

『雨月物語』全作の主題と発想の重要な契機を、批判精神に導かれた「憤り」と見る田中俊一氏は、本篇の議論の内容を弘法大師の歌の解釈とその詞書への批判と捉えられ、「この歌評が主題と如何に関連しているかは難解であり、かつ篇題と主題との本質的関係も曖昧である。」と述べられている。すなわち、同氏は、この篇の主題は修羅道に墜ちた豊臣秀次の「憤り」による批判にあり、論旨は紹巴の口を借りて語った言葉――「強に佛をたふとむ人の、歌の意に細

[14] 松田修『日本の古典 17　上田秋成』（集英社、1981 年 2 月）56 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

妙からぬは、これほどの訛は幾らをもしいづるなり。」の一語にあり、「ここに、超現実的世界における「物凄まじ」き非人間的憤りを感性的に真実化しようとしたこの作品の主題と発想を把握し得るのである」という結論を下されている[15]。

しかし、本当にそう言い切っていいだろうか。秀次の怨念はもちろんこの作品の趣向を構成する重要な要素の一つであるが、前述したように、秋成がこの作品を創作したきっかけは、秀次一行の亡霊が現われるという噂噺と作者が高野山を遊歴した時に聴いた仏法僧の鳴き声である。秋成の「そらごと」論あるいは「寓言論」に沿って考えれば、違う見方が出てくるのではなかろうか。あれだけ筆を費やして仏法僧という鳥に関する考証を披露したり、弘法大師の大徳を説いたり、「玉川のながれには毒あり」という歌について論じたりしたこと、そして、題名が「佛法僧」になっていること、主人公はあくまでも夢然であり秀次ではないこと、などを合わせ考えれば、この作品のモチーフは、秀次の「憤り」の発散というよりも、仏の霊験を無分別に信仰したり、世の中の諸相に無分別に感動したりする人たちへの批判、というところにあるのではないだろうか。

ちなみに、木越治氏は「佛法僧」において紹巴の説いたことと『胆大小心録』に書いてあるのを比較したうえで、いわゆる弘法大師の歌の歌体も詞書の内容も偽作である可能性があると考えたところは、両方共通しているが、偽作・謬説は誰の仕業かという問題が作品の中心論点であるか否かというところが異なっている、と指摘されている[16]。きわめて示唆に富む見解である。

五、典拠について

前に触れたように、主人公夢然（父子）という人物の設定は、冨士昭雄氏の指摘によると、『当世知恵鑑』巻一の主人公林喜兵衛から

[15] 田中俊一「『雨月物語』の世界」（『上田秋成文芸の世界』、1979年5月）参照。引用は27―28頁によった。
[16] 木越治「「仏法僧」断章」（『秋成論』、ぺりかん社、1995年5月）、370―371頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

連想したもので、その『当世知恵鑑』巻一は『剪燈新話』の「富貴発跡司志」よりも「佛法僧」に近いと言われる[17]。一方、鵜月洋氏は、本篇の書出しの文章は謡曲の詞章の型を背景に書かれたものだと指摘されている[18]。さらに、玉川の水と仏法僧という鳥に関しての知的考証の典拠については、鵜月洋氏と浅野三平氏の詳しい考察[19]によって、すでに明らかになっているので、ここでは取り上げないことにする。しかし、話の中心となる亡霊事件のよりどころについては、まだ吟味をする余地があるように思われる。以下、まずこれに関する従来の諸説を箇条書にまとめてみる。

（イ）後藤丹治氏の説

(1)『太平記』巻二十五の「宮方怨霊六本杉に会する事」及び巻二十七の「雲景未来記の事」と関係がある[20]。

(2) 高野山に登る部分は『剪燈新話』の「天台訪隠録」、亡霊出現の場面に関する構想は「富貴発跡司志」、一部の記述は『怪談とのゐ袋』巻一の「都聚楽の旧地ゆめ物語の事」から、それぞれヒントを得ている。特に『怪談とのゐ袋』がその主な典拠である[21]。

(3)剃髪者の妖怪変化に対する恐怖感を述べたところに似ているものとして、『源氏物語』の「手習の巻」があげられる[22]。

（ロ）鈴木敏也氏の説[23]。

(1)『伽婢子』に見られる恵林寺で幽霊が諸将を評する話が話の先蹤作となっているが、『怪談とのゐ袋』からヒントを得たことも考えられる。怨霊談は『太平記』の「宮方怨霊六本杉に

---

[17] 冨士昭雄「雨月物語の構想―浮世草子の影響」（日本文学研究資料叢書『秋成』、有精堂、1972年3月、112－113頁）参照。
[18] 鵜月洋『雨月物語評釈』（角川書店、1969年3月）332頁。
[19] 鵜月洋前掲書332－336頁および浅野三平「仏法僧の母胎」（『上田秋成研究』、桜楓社、278－281頁）参照。
[20] 後藤丹治「雨月物語と太平記との関係」（『学大国文』、1968年12月）。
[21] 後藤丹治「雨月物語原拠私考」（『学大国文』1958年11月）および「雨月物語の成立と剪燈新話」（『国語国文』22巻7号、1953年7月）参照。
[22] 後藤丹治「雨月物語に及ぼせる源氏物語の影響」『国語国文』（1934年12月）。
[23] 鈴木敏也「怪異小説作家としての上田秋成」『秋成研究資料集成』第12巻（クレス出版社、近衛典子監修、2003年1月）593―610頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

会する事」などと同じ系統である。

(2) これは「白峯」と同じく天狗魔王の部に入るべきもので、謡曲の修羅物の系統を踏襲したものである。

（ハ）藤井乙男氏の説[24]。

『怪談とのゐ袋』の「伏見桃山亡霊行列の事」と同一の噂噺が秋成に採用された。

（ニ）斉藤護一氏の説[25]

『剪燈新話』巻之二「龍堂霊会録」から影響を受けた。

（ホ）重友毅氏の説[26]。

『剪燈新話』の「龍堂霊会録」との関係も考えられないではないが、直接の典拠は『怪談とのゐ袋』の「伏見桃山亡霊行列の事」である。

（ヘ）野田寿雄氏の説[27]。

(1)『伽婢子』巻五の二「幽霊諸将を評す」は『雨月物語』の「佛法僧」の原拠になっている。山中で過去の武将の亡霊に出会うという怪談のパターンは、その後の多くの怪談集に出現した。

(2)『西鶴諸国ばなし』の「雲中の腕押」と『宗祇諸国物語』（貞享二年、1685 年）巻一の「金剛山の古跡」などがこれに類する。

（ト）浅野三平氏の説[28]

(1) 中国小説からの影響は『剪燈余話』の巻の三の「武平霊怪録」の方が「龍堂霊会録」、「天台訪隠録」、「富貴発跡司志」より「佛法僧」に近い。

(2) 日本の書物なら、『怪談登志男』（寛延三年、一七五〇年刊）

---

[24] 藤井乙男（『江戸文学研究』、クレス出版、近世文芸研究叢書、1995 年 5 月）。
[25] 斉藤護一「江戸時代における支那小説翻案の態度」（『国語と国文学』、1938 年 4 月）。
[26] 重友毅『秋成の研究』（文理書院、1971 年 5 月）129—137 頁参照。同じ言及は重友毅『雨月物語評釈』（明治書院、1954 年 4 月）225 頁にも見られる。
[27] 野田寿雄「怪異小説の系譜と秋成」（『講座日本文学 8 近世編Ⅱ』、三省堂、1969 年 3 月）43 頁。
[28] 浅野三平「「仏法僧」の母胎」（『上田秋成の研究』、桜楓社）278－281 頁。

臺灣人學學術期刊資料庫

巻一の一「蝦蟇の怨敵」の発端が、「佛法僧」のそれにやや近い。

（チ）丸山季夫氏の説[29]

『怪談とのゐ袋』の刊行にも絡んでいるので、素材を「伏見桃山亡霊事件」の噂から採ったのかそれとも作品から取ったのかということよりも、秋成が当時の噂噺をそのまま伝えているという摂取態度の方に注意すべきである。

（リ）鵜月洋氏の説[30]

秀次を魔的なものとして叙述する方法、家臣の名、秀次自刃の経緯、増田長盛、石田三成の計略によって自刃の窮地に追い込まれたことなど、いずれも『太閤記』『聚楽物語』『天正事録』などによっている。

（ヌ）井上泰至氏の説[31]

秀次主従の亡霊の典拠として、宝暦１１年正月京都の大芝居初演の歌舞伎『けいせい勝尾寺』をあげたい。

これらの諸説を全部考察すると煩雑になるので、ここでは、なお検討する余地があると思われるものだけ取り上げ、私見を述べることに止まる。

『怪談とのゐ袋』の話はごく短いが、「佛法僧」と比べてみると、言葉遣い・事件の設定・主人公の設定などにおいて、一致が見られるので、両者の間にかかわりがあるとする見方には賛成する。ただし、『怪談とのゐ袋』は、明和五年の正月に成立したものなので、『雨月物語』の成立時期をはっきりさせないかぎり、『怪談とのゐ袋』と「佛法僧」ないし「青頭巾」との関係を主張することは控えなければならない。鵜月洋氏の紹介によると、この話は明和五年刊、神道者大江文坡が『とのゐ草』を改題再摺して編んだ『怪談とのゐ袋』にあるが、それまでに刊行された『とのゐ草』にも『御伽物語』に

[29] 丸山季夫「秋成と噂話―怪談とのゐ袋と漫遊記から」（日本文学研究資料叢書『秋成』、有精堂、1972 年 3 月、123－126 頁）。
[30] 鵜月洋『雨月物語評釈』（角川書店、1969 年 3 月）382 頁。
[31] 井上泰至『雨月物語論―源泉と主題』（笠間書店、1999 年 4 月）197 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

もなかったという[32]。『怪談とのゐ袋』の成立時期が「佛法僧」の典拠になるかならないかにもかかわるので、ここでは野田寿雄氏の所説を参考にしながら考えてみよう。

野田氏の見方によれば、『怪談とのゐ袋』の元の書名は『とのゐ草』であり、万治三年（1660 年）に完成されたが、延宝六年（1678 年）に『御伽物語』と改題され再版された。さらに明和五年（1768 年）に『怪談とのゐ袋』と改名され、再版されたという[33]。そうだとすれば、『雨月物語』が序文どおりに明和五年に成立したとした場合、『怪談とのゐ袋』が秋成の目に入り、参考にされた可能性は、全くないでもないが低い。噂噺からヒントを得たとする藤井氏と丸山氏の説がより妥当のように思われる。なぜならば、『怪談とのゐ袋』は貞門の俳人荻田安静が収集し、弟子の以船が公刊した怪異小説であるが、原本の目録で「執心を以て姿を現す羽柴の殿下附り伏見桃山亡霊行列の事」とされていたのが、後になって当時の噂話である「伏見桃山亡霊事件」を描くものになったからである。秋成もそのような噂話を耳にしていたことは当然考えられる。

一方、十九章十七話からなる『当世知恵鑑』と『太平記』の二書も、「佛法僧」と類似しているところがあることは否定できない。しかし、『怪談とのゐ袋』巻一の「都聚楽の旧地ゆめ物語の事」と『太平記』の「宮方怨霊六本杉に会する事」との間にさまざまな点で重なるものがあり、のちに書き加えられた同じ『怪談とのゐ袋』巻四の「伏見桃山亡霊行列の事」の類話になっている。一方、内容から見て「都聚楽の旧地ゆめ物語の事」は明らかに『太平記』から趣向をとっているので、「佛法僧」は「伏見桃山亡霊行列の事」から構想をとったとする通説のとおりだとすれば、「都聚楽の旧地ゆめ物語の事」と「宮方怨霊六本杉に会する事」を本篇の構想のよりどころとする後藤氏の説も、『当世知恵鑑』の巻一は『剪燈新話』よりも「佛

[32] 鵜月洋『雨月物語評釈』（角川書店、1969 年 3 月）333 頁参照。
[33] 野田寿雄「怪異小説の系譜と秋成」（『講座日本文学 8 近世編Ⅱ』、三省堂、1969 年 3 月）、127－128 頁参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

法僧」に近いとする冨士氏の説も、再考する必要があるように思われる。それを検討する前に、まず、「佛法僧」と中国の典籍との交渉について見ることにする。

「佛法僧」と交渉のある中国の作品として、『剪燈新話』の「天台訪隠録」、「富貴発跡司志」、「龍堂霊会録」、および『剪燈余話』巻の三の「武平霊怪録」があげられる。その他に、『醒世恆言』巻六の「小水湾天狐貽書」と『剪燈新話』巻三の「永州野廟記」を加えたい。

後藤氏の説によると、夢然父子が高野山に登る部分の叙述は完全に「天台訪隠録」に基づいているという。その証拠として、次の諸点があげられている[34]。

(一)「佛法僧」で事件発生の時期を夏の始めとしたのは「天台訪隠録」の「端午日」による。

(二)「青葉の茂みをわけつつ」とか、「杉の下道のをぐらき」とか、「木立は雲をしのぎて茂さぶ」とかは「樹木陰鬱」に似ている。

(三)「道のゆくての嶮しきになづみて」は「同行数人憚於渉険」と一致する。

(四)「おもはずも日かたぶきぬ」は、「斜陽在嶺」による。

(五)「道に界ふ水の音ほそぼそと清わたりて物がなしき」は、「瀑布泉流而界道」というのからヒントを得た。

(六)「「ここに宿からん」といへど、ふつに答ふるものなし」は、「相顧不語、漠然無延接之意」に相当する。

(七) 天台山中の物寂しい情景は、霊廟の夜陰情景に符合する。

(八)「寝られぬままに」は「不能成寝爾」と、意味が全く同じである。

(九)昔話をする夢然の様子を形容する「小やかにかたるも清て、心ぼそし」は「神清骨冷」に似ている。

(十)「方五十町に開きて、あやしげなる林も見えず」と「豁然寛

[34] 後藤丹治「雨月物語の成立と剪燈新話」(『国語国文』22巻7号、1953年7月)。

臺灣大學學術期刊資料庫

敞」、「小石だも掃ひし福田」と「以巨石為門」、「石田茅屋」にはそれぞれ類似したところがある。

（十一）夢然が高野山の霊跡たるゆえんを作之治に語るのは、徐逸が上舎に三代の故事を語るのと、さながらである。

これらの証拠は、たしかに「天台訪隠録」とのかかわりを裏付けるのに充分である。それでも、夢然父子が高野山に登る部分の叙述は、『醒世恆言』第六巻の「小水湾天狐貽書」と交渉があると私は思う。

「小水湾天狐貽書」というのは、王臣の家庭状況の説明と、王臣が家族の王福をつれて京城へ赴くことから書き出している。二人は「一路遊山翫水、夜宿曉行、不到一日來至一所在」（途中、景色を楽しみながら、夜になれば泊まり、朝になれば発ち、やがてある所にさしかかった）とあるように、物見遊山しながら、あるところにさしかかった。そこは「行人亦甚稀少、但見岡巒圍繞、樹木陰鬱、斜飛瀑布噴萬丈……鳥道逶迤行客少、山花多艷如含咲、野鳥無名只亂啼」（道行く人がほとんどなく、周りは山に囲まれ、木々は鬱蒼としている。花は咲き乱れ、名も知らぬ野鳥がしきりに鳴いている。）と描かれている。王臣、王福二人は、山林の景色に心を奪われ、「緩轡而行、不覺天色漸曉」と、馬に乗ってゆっくり進んでいるうちに日が暮れた。ここまでの叙述は「天台訪隠録」よりも「佛法僧」に接近しているように思われる。例えば、

（一）夢然が息子を伴い、吉野の花を眺めながら高野山に登るところの描写は、王臣が王福を連れて道中見物しながら行人の少ない野外の樹林に来るところのそれと、対照できる。

（二）夢然は息子に都の人の様子でも見せようと考えて京都へ、それから九州へ、今度は富士や筑波へと諸国の名勝地を見物している旅の途中で高野山に来たのであるが、王臣主僕は地方から都へ行く旅の途中であった。両方とも、最初から京城へ行くことが目的だったので、これも多少ながら、対照というか類似というのになっていると言える。

臺灣大學學術期刊資料庫

（三）「青葉の茂み」と「木立は雲をしのぎて茂さび」と「杉の下道のをぐらき」は「小水湾天狐貽書」の「樹木陰鬱」、「茂林」と契合する。

（四）「道のゆくての嶮しきになづみて」も、「鳥道逶迤行客少」と一脈相通ずるところがある。

（五）「おもはずも日がかたふきぬ」は「不覺天色漸曉」と、時間の上で一致している。

（六）夢然父子の花見と仏法僧の鳴き声の設定も、或は秋成が間接に「山花多艶如含咲」「野鳥無名只亂啼」というのから連想して、「佛法僧」を書いたものであろう。

（七）「行人」ということばの一致すること。

（八）「此地田土豐阜、風俗淳厚、昔開創甚難」という叙述も、高野山が清浄の地であること、大師が霊地を開いた時「隠神を役して道なきをひらき、巖を鐫には……」云々の叙述と全く交渉がないとは言えないだろう。

要するに、「天台訪隠録」も「小水湾天狐貽書」も、「佛法僧」の冒頭部分、すなわち高野山に登る部分の描写と似ていることは否定できない。しかも、「天台訪隠録」よりもむしろ「小水湾天狐貽書」を参考にした痕跡が明白なように思われる。

次に、「白峯」の典拠ともされる「永州野廟記」と「佛法僧」とのかかわりを取り上げよう。まず、舞台の類似を指摘することができる。

（一）「佛法僧」では、高野山の「霊廟」とその近くとなっており、「永州野廟記」では、「神廟」となっている。

（二）「木立は雲をしのぎて茂さび」は、「大木參天而蔽日」と似通っている。

（三）「しののめの明ゆく空にふる露の冷やかなるに生出しかど、いまだ明きらぬ恐しさに、大師の御名をせはしく唱へつつ、漸日出るを見て、いそぎ山をくだり……」の構想は、「平日能誦玉樞經、形勢既迫、且行且誦、不絶於口、須臾則雲收風止、

臺灣大學學術期刊資料庫

天地開朗」からヒントを得たと思われる。

（四）「一日、夢然三条の橋を過る時、悪ぎやく塚の事思ひ出るより」は、「永州野廟記」の「回途再經其處」「思憶前事」にあたる。

（五）「おどろいて簀子をくだり、土に俯して跪まる」という夢然の様子の描写は、「屏息俟命」と意味の上で似ている。

（六）なお、「佛法僧」にある「玉蘘玉簾珠衣の類」と「永州野廟記」にある「玉珊簾」の類似も偶然とは考えられない。

（七）亡霊一行が御霊に着座する部分の描写が、「富貴発跡司志」ないし『怪談とのゐ袋』のと非常に類似しているのは事実であるが、「永州野廟記」にも、「是夜、夢駃卒而追、與之偕行至大宮殿、侍衛羅列、曹局分布、駃卒列立大庭下」という叙述があり、「佛法僧」と必ずしも無関係ではない。

（八）「永州野廟記」も「佛法僧」も、主人公は偶然、怪異に出会い、極度の恐怖を体験したあと、再び不気味なところを通って、前の不気味さを思い出すという恐しさの後味を強調する構想を持っている点で共通している。

これらの類似点がある以上、「白峯」の典拠とされる「永州野廟記」も「佛法僧」の典拠の一つとして認めてよいのではないか、というのが私の結論である。

いずれにしても、秋成が中日両国の文学作品から引用したり、ヒントを得たりしていることは事実であるが、さらに独自の知識的性格を加味し、知的な題名を付けた結果として出来上がったのが本篇である。

六、終わりに

佐藤春夫は「秋成を語る」という文章の中で、秋成を「当時には珍しい知性の作家である。」と評している[35]。この評言は、仏法僧という鳥と高野玉川に関する考証が中心になって展開された「佛法

[35] 『佐藤春夫全集』第十二巻（講談社、1970 年 3 月）464 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

僧」にもっともふさわしいように思われる。このような展開の形に、秋成の「小説家の学者」意識が色濃く出ている、と高田衛氏は指摘されている[36]。まさにその通りである。この作品によって、秋成は、読本作家としてありがちな知識の披露をしながら、文人作家としての一面を示している。それと同時に、その怪異の展開を通じて、人間の盲目な信仰や信頼も批判している。

本篇のクライマックスは、夢然親子が修羅道に連れられかけたところにあると言えよう。つまり「よしなき奴に我姿を見せつるぞ。他二人も修羅につれ来れ」という秀次の一言で、親子二人が「一世ならぬ善縁なり」と思った聖域崇拝がもう少しで修羅道につれられるきっかけになるところだったのである。幸いに「例の悪業なせさせ給ひそ」という老臣たちの誡めの言葉があったおかげで、無罪放免された。これはどの典拠にも見当たらない秋成の独創的な趣向かと思われるが、この趣向により、秋成が秀次を「殺生関白」としてとらえようとした意図が明らかになっている。

秀次は、一方では、織豊政権期の武将で、茶の湯や能などの芸能、また連歌などの文芸活動も盛んに行ったと言われ[37]、「殺生関白」のようなマイナス的なイメージはなかった。しかし、もう一方では、「元来漁色荒淫の性があり、そのために罪なき者まで殺して楽しんだと伝えられている」「また常に遊猟を好んだという」のようにも紹介されている[38]。この物語の大筋は、主に石田三成、増田長盛の企みで秀次が自刃に追いやられた経緯を描いた『太閤記』『聚楽物語』などに基づいていると言われるが、それはともかくとして、秋成が秀次を「殺生関白」のイメージで描こうとした意図は、上にあげた言葉によって裏付けられている。

人間を修羅道に連れて行くことは殺すことにほかならない。何の恨みもないのに、平気で殺そうとする残虐な亡霊たちが、「扶桑第一

[36] 高田衛『雨月物語評解』（有精堂、1980年9月）20頁。
[37] 秀次に関する肯定的な紹介は、『岩波日本史辞典』（1999年10月、849頁、969頁）の「豊臣秀次」の項目および「秀次事件」の項目を参照。
[38] 鵜月洋『雨月物語評釈』（角川書店、1969年3月）377頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

の霊場」でうごめき、はびこっているということは、秋成がその意識の深層において神様は存在しないと考えていることの反映かもしれない。「清浄の地」と言われるところでも、実は大徳の弘法大師の仏力と極悪な殺生関白の魔力が並存する空間であり、それがそのまま善と悪が同時に存在する世の中をも象徴している。この世の中に生きる人間にとって、善悪は一念の中にあり、禍福はあざなえる縄のごとしで、宗教の力が頼りにならない場合もよくあるから、他力よりも自力、これこそ「佛法僧」のモチーフではないか。

参考文献

浅野三平（1979）『雨月物語・癇癖談』新潮社

浅野三平（1985）「「仏法僧」の母胎」『上田秋成の研究』桜楓社

井上泰至（1999）『雨月物語論―源泉と主題』笠間書院

鵜月洋（1969）『雨月物語評釈』角川書店

大輪靖宏（1976）『上田秋成文学の研究』笠間書院

大輪靖弘（1982）「上田秋成その生き方と文章」『上田秋成の研究』春秋社

大曽根章介ほか編（1983）『研究資料日本古典文学四 近世小説』明治書院

勝倉寿一（1994）『上田秋成の古典学と文芸に関する研究』風間書房

木越治（1995）「「仏法僧」断章」『秋成論』ぺりかん社

慶大斯道文庫編（1963）『江戸時代書林出版書籍目録集成 2』井上書房

国文学資料館編（1990）『古典籍総合目録第一巻』岩波書店

後藤丹治（1972）「雨月物語と本朝神社考との関係」『秋成』有精堂

後藤丹治（1968）「雨月物語と太平記との関係」『学大国文』

後藤丹治（1958）「雨月物語原拠私考」『学大国文』創刊号 11 月

後藤丹治（1953）「雨月物語の成立と剪燈新話」『国語国文』22 巻 7 号

後藤丹治（1934）「雨月物語に及ぼせる源氏物語の影響」『国語国文』

臺灣大學學術期刊資料庫

近衛典子（2003）『秋成研究資料集成 第 12 巻』クレス出版社
斉藤護一（1938）「江戸時代における支那小説翻案の態度」『国語と国文学』4 月
重友毅（1938）「翻訳翻案文学としての近世小説ー特に怪談ものを中心としてー」『国語と国文学』15－4
重友毅（1954）『雨月物語評釈』明治書院
重友毅（1971）「雨月物語の知識的性格」『秋成の研究』文理書院
諏訪春雄（1997）「江戸文学とはなにか」『江戸文学の方法』勉誠社
諏訪春雄・日野龍夫編（1977）『江戸文学と中国』毎日新聞社
高田衛（2001）『江戸文学の虚構と形象』森話社
高田衛（1972）「幻語の構造」『上田秋成　怪異雄勁の文学』思潮社
高田衛 稲田篤信（2001）『新註 雨月物語』勉誠出版社
高田衛（1980）『雨月物語評解』有精堂
建部綾足著作刊行会編（1986－1990）『建部綾足全集 第 9 巻』国書刊行会
田中俊一（1979）『上田秋成文芸の世界』桜楓社
田中優子（1987）「雨月物語と春雨物語」日本文学協会編『日本文学講座 5 物語・小説 Ⅱ』大修館
津田左右吉（1970）『文学に現はれたる国民思想の研究第四巻』岩波書店
暉峻康隆（1967）「文人文学の成立」暉峻康隆・郡司正勝編『江戸市民文学の開花』至文堂
暉峻康隆（1967）「文人的作家―庭鐘と秋成」暉峻康隆・郡司正勝編『江戸市民文学の開花』至文堂
長島弘明（1998）『雨月物語の世界』筑摩書房
中村博保（1999）『上田秋成の研究』ぺりかん社
中村幸彦編（1968）『上田秋成集』（日本古典文学大系 56）岩波書店
中村幸彦ほか編（1973）『英草紙　西山物語　雨月物語　春雨物語』（日本古典文学全集 48）小学館
中村幸彦（1975）『近世文芸思潮攷』岩波書店

臺灣大學學術期刊資料庫

中村幸彦（1997）『秋成・馬琴』角川書店

野田寿雄（1969）「怪異小説の系譜と秋成」『講座日本文学８ 近世編Ⅱ』三省堂

坂東健雄（1999）『上田秋成『雨月物語』論』和泉書院

日野龍夫（1986）「解説」市古貞次・小田切進編『雨月物語』ほるぷ出版社

冨士昭雄（1972）「雨月物語の構想―浮世草子の影響」日本文学研究資料叢書『秋成』有精堂

藤井乙男（1995）『江戸文学研究』（近世文芸研究叢書）クレス出版社

松田修（1981）『上田秋成』（図説日本の古典 17）集英社

丸山季夫（1972）「秋成と噂話―怪談とのゐ袋と漫遊記から」日本文学研究資料叢書『秋成』有精堂

三島由紀夫（1972）「雨月物語について」『上田秋成　怪異雄勁の文学』思潮社

森田喜郎（1991）「上田秋成小説の展開」『上田秋成小説の研究』和泉書院

鷲山樹心（1983）『上田秋成の文芸的境界』和泉書院

臺灣大學學術期刊資料庫

臺灣大學學術期刊資料庫